
Muv-Luv A-Generation

小麦粉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M u v - L u v A - G e n e r a t i o n

【Nコード】

N 4 0 8 5 P

【作者名】

小麦粉

【あらすじ】

ガンダムのような歴史の中の戦争を何回も繰り返している男。今回も一つの戦争が終わり、また別の時代へと飛ばされるものだと思っていた。

しかし、飛ばされた先の世界は今までのガンダムとは異なる全く未知なる世界であった・・・。

初めての小説で緊張しています。マブラヴの設定など若干・・・というか、かなりかけ離れてしまう可能性もありますのでご了承ください

さい。

また話が進むに連れ、内容に矛盾が生じたり変な方向に行ってしまうこともある為、それに気付いたら指摘など遠慮なく申して下さい。よろしく願います。

プロローグ（前書き）

始めまして。

まず始めにこれを読む注意点を。

・ 作者はマブラヴ（AL、TEも含め）の知識が若干うる覚えです。なのでストーリーに よっては存在するはずのない人物が出てきたり、名前を間違っていたり、キャラの 性格が定まっていけない可能性があります。なので原作沿いではなく、オリジナルな ストーリーになると思います。

・ 無双には多分なりません。MS1機でハイヴ攻略なんかできません。

・ マブラヴSSでよく見る政治話は作者が頭悪いんで、かなり変な内容になってしまう と思います。もしくはカットします。

以上です。

プロローグ

「アクシズ地球から離れていきます!」

ロンド・ベルのクルーが目の中の光景を信じられない風に眺めながら報告する。アクシズが地球に衝突するのも後わずか、もう誰もが諦めかけていたその時に奇跡は起こった。サイコフレームの共鳴により人々の想いが一つとなり、アクシズが落下コースから大きく外れていく……。

宇宙世紀0093年、後にシャアの反乱と呼ばれたこの戦いに終止符がうたれた。

「この時代の戦争は終わったか……」

アクシズを眺めながらそう静かに男は呟いた。回りには戦争で破壊されたMSの残骸が大量に漂っている。全てこの男が一人で撃破したものである。しかし、男の乗るMSはこの時代、ギラ・ドーガやジェガンなどが主流のとなっている今、ひととき違う異彩なMSであった。

全身が白と赤の色で構成され、両肩からはまるで翼を模したような姿の外見は、この時代には存在するはずのないMS……。

『フェニックスガンダム』それが彼の乗る機体。

ナノスキン装甲による自動修復とサイコミュ兵器のフェザーファンネルを持ち、高火力・高機動性を実現したガンダムの名を冠するに相応しい機体である。

美しく光り輝いているアクシズを見つめながら、どのくらいの時間がたっただろうか？フェニックスガンダムのコックピットに通信が

入る。彼の母艦からの通信であった。

「こちらゼノンだ。マーク、この時代の戦争も終わったな」

そう通信を入れてきたのは男が所属している戦艦、それもこのUC0093年には存在している筈のないザムス・ガルの艦長ゼノン・ティーゲルからであった。

「ああ・・ティーゲル大佐、次はどの時代へ移るんだろうな？」

「さてな・・。こればかりは分からんよ。なにせ法則性もなくバラバラだ。また一年戦争の時代に戻ることもありえるな」

「一年戦争ですか。その時代についてしまったら今の僕たちの機体では一気に決着がついてしまいかもしれませんよ？」

そう通信を割り込んできたのはジュナス・リアム。格闘戦を得意としており、心優しく仲間想いな気持ちをもつ少年である。

「いや、逆に今度はジオン側に付くという展開もあるかも知れんぞ？」

そうゼノンは告げる。

「ジオンですか？確かに短い期間でしたらジオンについていたこともありましたが、一年戦争からジオンについてしまうと、さすがに歴史が変わってしまうのでは・・。」

「そうだな、確かに俺たちが今まで戦ってきたどの時代でも歴史はジオンの敗北という形で残っていた。つまりは俺たちはジオンが敗れてからの歴史を様々な時代にタイムスリップしているのではないかと思っている。」

マークの言葉にジュナスは頷く。

「僕もそれは思っていました。宇宙世紀が130年になった時代でもアムロ・レイやシャア・アズナブルは非常に有名でしたし。今のこの瞬間に体験しているシャアの反乱は未来の歴史の教科書を見れば必ず載っています。」

「そうだな。俺たちは宇宙世紀になりMSが出てきてからタイムスリップという形で様々な戦争に加入してきた。だがな、リアム少尉。俺達が経験してきた戦争の歴史の教科書には俺達の部隊のことは書かれていたか？」

そうマークに言われ、ジュナスは「あつ・・・」と小さく何かに気づいたみたいに小さく声を漏らす。

「そうだ。一年戦争の事はもちろん、カミーユ・ビダンやハマーン・カーンなど歴史上、有名な人物はもちろん書かれているが俺達のこととは何一つ歴史には書かれていないんだ」

「・・・!!。隊長・・・それは・・・」

「前々から妙だとは思っていた。別に俺は歴史に名を残すような英雄になりたいわけではない。だが、自分でいうのも何だが、俺達の部隊は非常に精鋭かつ最強だと思っている。戦争の象徴でもあるガンダムを多数所有し、その時代では考えられない性能のMSで様々な戦果を挙げてきた。これで有名にならない方がおかしいんだ。」

「確かに・・・。俺達はかなり特異な部隊だ。戦争が始まれば現れて、終結すれば消えていく。だが、過去ならともかく未来に現れ

たら俺達を覚えている兵士たちがいてもおかしくはない。」

「そうだ。ティーゲル大佐の言うとおりだ。現に今の時代のアムロ・レイなどは何度も共に戦った事があるが、まるで俺達のことは覚えてくれちゃいないからな……。」

マークはやや寂しそうな声で呟く。やはり一年戦争やグリプス戦役を共に戦った者としては寂しいものがあるのだろう。

「隊長……。」

「まあともかくだ、リアム少尉。そんな訳で俺はこの状況に対する一つの仮説を立ててみた。」

「仮説……ですか？」

「ああ……。俺達は戦争が終結すれば、この時代からは消え別の戦争が始まればまた現れる。」

「そうですね。それで様々な年代に飛んでいるんです。」

「俺も最初はそう考えていた。何故かは分からんがな……。」

理由は分からない。自分の意思が気付いたら、そこはMSのコックピットの中だった。そこから仲間達と一緒に戦っていた。そして戦争が終われば、しばらくして意識が遠のき違う時代へと飛ばされ仲間達と再び戦乱の中に佇んでいた。もうこれを何回経験したか分からない。何百体MSを撃破したのかさえ分からない。最初は新兵同然な腕前だったが、数え切れないくらいの戦争を経験して腕が上がっていった。自分でいうのも何だが、UC最強とさえ呼ばれたアムロ・レイにすら匹敵する強さだと思っている。

「それで、その仮説とやらは一体なんだね？」

物思いにふけつているとゼノンから問われる。

「すまない、艦長。その仮説なのだが、とある科学者が発表した論文を見つけ思いついたんだ。」

「科学者ですか？」

「ああ、そうだ。名前は忘れたが・・・随分と変わった研究をしていたみたいで、回りからも変わり者と思われていたみたいだな。」

「へえ、どんな論文だったのですか？」

「確か・・・因果律量子論という名だったか。」

「それって・・・一体どんな内容なんですか？」

「簡単に言えば別次元に行き来できたり、別次元から存在を呼び込んだりするという内容だったな。」

「なんとも突拍子な話だな。でも確かにその学者は随分と変わっているな。今の時代、研究といたら兵器の開発か地球環境についての研究が主流だろうに。」

ゼノンがそう発言するが無理もないだろう。このご時勢、そんな変わった研究をするよりももっと兵器開発などに力を入れたほうが成功すれば金にはなるだろうし、仮にその因果律量子論とやらが証明されても別次元にいける技術などはないのだから。

「だがその論文内容に基づけば俺達のこの変わった状況にも説明がつくんだ。」

「別次元に行き来する……。隊長まさかそれって……。」

「そうだ。俺達は今までタイムスリップして様々な時代の戦争をしてきたと思っていた。だが俺達は同じようで全く違う世界、別次元に飛んでいたとしたら……。」

「つまりはパラレルワールドという訳か……。なるほどな……。」

「信じられんかもしれんがな……。だがそう仮定すれば誰も俺達のことを覚えていないことにも説明がつく。」

「「「……」」」

マークの言葉を最後に誰もが口をつむぐ。なぜ自分達はそんな状況におかれているのか？考えても答えは出ず、分からないことばかりである。

回りが重苦しい雰囲気に含まれていたその時、また新たに通信が入る。

「あゝもうっ！！なーに急にしけちゃった感じになっちゃってんのよ！！しっかりしてくださいよ！艦長達！！」

そう通信越しに叫ぶのはクレア・ヒースロー。お調子者で隊のムードメーカー的な存在である。彼女に続き更に通信が入る。

「そうですよ。仮にギルダール隊長の仮説が本当のことだとしても、今の状況では何も解決策はないんです。なら今までの通りでいきましょう。」

そういう彼女の名はエリス・クロード。ジュナスと同じく心優しく争いを好まない性格ではあるが、MSの操縦に関してはマークの次に腕が立つ存在である。マークも彼女の腕を信頼して、自身の部隊の副隊長へと任命してある。

そんな二人に励まされマークの表情も少し明るくなる。

「そうだな。二人の言うとおりだ。ありがとうクロード中尉、ヒーロー少尉。」

マークはそう言い、フェニックスを母艦へと向かわせる。もうすでにマーク以外の機体はザムス・ガルへと帰艦しており、残りの機体はフェニックスだけである。

「へへ、隊長に褒められちゃった。」

そうクレアは頬を赤らめながら言い

「僕はクレアの明るさが羨ましいよ。」

ジュナスはクレアにそう言う。二人の関係は同期と言ってもいいのだろう。同じ時期にゼノンの戦艦へと現れて、これまで共に戦い続けた仲だ。

「あのね、ジュナス。私達のやっている事は悲しいけど戦争なのよね。いつ終わるか分からない戦争をずっと続けてんのよ。人殺しよ？人殺し。そんな気の滅入ることをずっと続けてたら心が壊れちゃ

うじゃない。だから、せめて気分だけは明るくしとかないとね！」

普段、おちゃらけてふざけているクリアだが、やはり強い女性なのだろう。少なくともずっと気分を明るくするのなんて簡単な様で難しいのだ。特にこの生きるか死ぬかの世界では。

「ふふっ……。さあ隊長、早く帰艦してください。次の戦いの場に移るまでの間、しばらく休憩しましょう。」

「ああ……。そうだな。」

エリスにせかされて、機体のフットペダルを踏み込む。加速したフエニックスの中でマークは考える。

（皆強いな……。俺の部下達は。何回と終わらないループした戦争を経験してきたのに……。エリスも本音を言っと戦いたくないはずだ。だが……。俺がMS隊を離れると言っても、聞かないのだろうな。）

かつて、エリスがここに配属されしばらく経った時、マークは格納庫で一人泣いているエリスを見たときがある。その時に彼女の本音を聞き、艦のクルーとして働く事を進めたが彼女はそれを拒否した。自分だけがそんな理由で戦いを辞める事などできないと。回りの人達もそんな想いで戦っているのだと。そう言うエリスの目は涙を浮かべながらも強い意志の力が感じられた。

（俺はいずれ、このふざけた次元転移の解決を絶対に見つけてやる。そして、部下たちがもう二度と戦わなくてもいいような世界を掴み取る！）

マークはそう静かに心の中で強く決意し、仲間達のいる母艦へと帰艦しようとした。

・・・その時だった。フェニックスを中心に白く眩い光が広がっていく。

「これは・・・まさか！もう移動しようとするのか！？」

珍しく常に冷静沈着な彼が慌ただしい声を上げる。

その状況をモニターで見ていた他の仲間達もマークの異変に気付く。

「隊長！！」

ジュナスとクレアはマークの様子を心配し、大声を上げる。

「そんな！？今までは全員が母艦に帰艦してから、移動していたのに何で！？」

エリスも今までにない状況に混乱してしまい、声を荒げる。

「くっ・・・、駄目だ・・・！意識が・・・！！」

意識が遠のくのは別の時代へと移る前兆みたいなものだ。だがここまで強く意識を引っ張られた事があっただろうか。これまでの経験ではまるで眠りにつくかの様にゆっくりと意識が浸透していき、別時代へと飛んでいった。だが今回は違う。まるで何者かに強制的に意識を引っ張られていく感じがする。

「くううつ！！誰だ！？俺を呼ぶ奴は！！？」

「・・・さい！・・・ます・・・！」

「誰だ！？いったい何を言っている！？」

マークは薄れいく意識の中で自分を呼んでいる存在にたいし、叫び続けた。

そして・・・最後にその声をはっきりと聞くことができた。

「お願いします！助けてください！！私達の世界を助けて！」

マークはその声を最後に意識を手放し、深い眠りにへと落ちていく。

光が収まった後、周囲にはフェニックスガンダムとマーク・ギルダ―の姿はどこにもなかった・・・。

プロローグ（後書き）

見てくださってありがとうございます。

おかしい点や話が矛盾している所などを見つけたらドンドン指摘して下さい。

ブローグ02（02話）（前書き）

Gジェネオリキャラのマークさんですが、確実にキャラが定まっ
てないと思います。

プロローグ02（02話）

宇宙空間での白い光に包まれた後どれくらいの時間が経ったのだろうか。軽い頭痛を覚えながらマークの意識は静かに覚醒した。

「ここは……。」

つい先ほどまでは母艦に戻る途中だったはずだ。しかし、現在のフェニックスは全てのシステムがダウンし全周囲360度モニターは稼動しておらず、ただ薄暗いコックピットの中で静寂が広がっているだけだった。

「また別の時代へ移ったのか？」

先ほど起こった状況を考えれば確実にそうなのだろう。マークは何かシステムが停止していたフェニックスを再起動させ、コックピットから周囲の状況を観察する。

そこは広い格納庫のような場所だった。すくなくとも自分が所属していたザムス・ガルの格納庫ではない。周りにはマークが搭乗するフェニックス以外の機体は見当たらなかった。

「とりあえず通信を……。こちらマーク、誰か応答してくれ。」

マークが通信を入れるが通信機はザーザー……と静かに音になるばかりであり、誰からの応答も帰ってくることなく、しばらくマークは同じ内容を繰り返していたがやがて諦めたのか通信機の電源を切る。

「クソッ……。俺一人だけなのか？ ティーゲル大佐やエリス、皆

に通信が繋がらないとは……。今までこんな事なかったぞ。」

考えてみれば今回の件は異常である。今までは戦争が終結して全員が母艦へと帰艦して、しばらく経ってから別の時代へと移っていた。

だが、今回はそんなケースから外れ、フェニックスだけが光に包まれていき、そしてマークが意識を手放す前に聞こえたあの『声』。転移したのはマークただ一人。マークは冷静に状況を考える。

（思えば……。あの光に包まれた時に聞こえてきた『声』……。何を言っているかさっぱり分からなかったが、最後だけは確実に聞こえた。『助けて！』と。なら俺をここに呼び寄せたのはそいつか？ そいつが俺に助けを求めた……。？なぜ俺だけに？）

考えても分からない事ばかりである。

……。考えに没頭していて、どれくらいの時間がたったのだろうか？ マークはとりあえず自分が何処にいるのかを把握する為に施設内の散策することに決めた。

（重力を感じることから、ここは宇宙ではなく地球だろう。それにこれだけ大きな格納庫があるのなら、それなりに整備兵もいるはずだ。なのにさつきから人影は全く見えない。）

いくら周囲にはフェニックス以外の機体はなくとも、格納庫が全くの無人ということはいくら何でもありえない。この基地は異常だ。そうマークは判断し、念の為に腰に付けていた9mm拳銃を取り出し、マガジンをセットする。フェニックスのコックピットハッチを開き、ワイヤーで地面に降りる。足が地面に着地した時に、しっかりと重力を感じたことからやはり地球であると確信しながら手元のコンソールでコックピットを閉じ、何かあればすぐに発進できる様、

機体をスタンバイ状態で待機させる。

「よし、行くか」

マークは警戒しながら格納庫を進んでいく。一応、機材や資材などは置いてあった為、そこに身を隠しながら慎重に進んでいた。やはり周囲には誰の姿もなく、やがて格納庫からの出口へとたどり着いた。

それなりに広い通路を進みながらドアを一つ一つ確認しながら施設の様子を調べる。食堂、会議室、トイレ、移住区等と発見したがやはりここでも人は見られなかった。

（この広さや構造からして、ここは戦艦ではなく基地内なのだろう。だが、基地なのにここまで人っこ一人見当たらないとはどういうことだ？それに人が住んでないにも係わらず綺麗すぎる。）

そうマークは考えながらも歩き、気付いたら目の前には大きな自動扉があった。これまでの内装とはひと際と違うその外見はマークはおそらく司令室だろうと判断する。

人が見当たらないことから若干薄れていた警戒心を再び取り戻し拳銃を両手でしっかりと構え、何があってもいいよう直ぐ発砲できる様に扉に近づいていく。やがて扉との距離が約1m以内となった所でプシューと独自の音と共に扉が開く。

・・・やはりそこはマークの予想通り司令室であり、予想通りの無人であった。

構えていた拳銃を下ろし、マークは司令室のコンソールへと近づいていく。この基地が何処にあるかと基地内の状況を調べる為であった。

しばらくコンソールを操作しながらマークは次々と情報を集めていく。ディスプレイを眺めながら、ある一点でマークは驚きの声を上げた。

「馬鹿な……。これは……。現在時刻……。西暦1997年2月4日だと!?」

まさかの宇宙世紀ではなくその遙か前、まだMSは存在しなく人類が宇宙へと進出していないマーク達が旧暦と呼んでいた時代であった。

「これは……。まさか、そんなことが!?それに、この基地の所在場所は日本海域内!?海の中だったというのか!?」

確かに思い返せば基地内を調べている時は窓なんか見当たらず外の景色は分からなかった。だが、それは単に基地内の秘密保守か地下内だと思っていたからだ。

「考えれば考えるほど分らん。俺の記憶が正しければ旧暦の時代はこんな海中に巨大な基地をつくれる技術はなかった筈だ。それに日本帝国海域?日本は第2次世界大戦に敗北してから確か帝国ではなくなつた筈だが……」

マークの仲間にはアキラ・ホンゴウという名の日本人がいた。本人は常に熱血漢で暑苦しい男だったが……。そのアキラからは様々な日本の事を聞かされた。マーク自身、博識な方であり知識はあつても困らない為に歴史の事なども勉強していた。

「因果律量子論……。ここはやはり平行世界なのか……。?」

だが、いくら平行世界とはいえ、ここまで・・・自分達が活躍していた時代から一気に数百年と飛んだ過去の時代へと戻ってしまうものだろうか？

MSも無く兵器は未だに航空機や戦車が主流の中、助けを求めた声の主は一体この時代で自分に何をさせたい？

冷静沈着で常に落ち着いた思考で物事を考えるマークでも流石に頭が痛くなってきた。仲間とはぐれ頼れるのは自分自身と愛機のフェニックスガンダムのみ。

目頭を人差し指と親指で押さえながらマークはドカッと椅子に腰掛ける。

（とりあえずこれからどうする？この世界でどうやって生きる？前にいた世界ではいくら自分達の機体はその時代と異なっていたても、その時代の連中からは何も機体に対してはつつ込んでいたのはなかった。だが、ここまで違う状況となると流石にそうなるのかは分からん。それに確か旧暦では二足歩行の巨大兵器を作るのは理論上、無理とされていたと思うが・・・。それがいきなり現れたら流石にパニックになるのではないか？というか、この世界は戦争なんかが起こっているのか？）

マークがそう考えながら、ふと別のディスプレイに目を向ける。そこにはCAPTAL 0と映し出されながら操作可能なモニター画面があった。

「キャピタル0・・・」

マークはその単語に見覚えがある。自分達が乗るMSを開発や改造する為に必要な資金のようなものであり入手方法は敵機を撃破したりと実にシンプルなもので、戦いが終わればその戦績に応じてボー

ナスの様に支払われたりしていた。

誰かから直接に支払われるものではない。いつの間にか母艦の管理システムコンピューターに入金みたいな形で支払われていた。何故そんな風になっているのかは未だに分からないが……。

だが、なぜキャピタルが0なのか？それなりにキャピタルは蓄えてあったはずだ。少なくとも大型戦闘艦が5つくらい製造できるくらいには。

マークは軽いため息を吐き、モニターを操作し別の項目を映し出す。なぜいきなり資金がなくなったのか、この際（実際よくないが）どうでもいい。ここまで来るともうどうにでもなれとマークは半ば自暴自棄へと陥っていた。

そして次のモニターに目を通す。どうやら、この基地内に保有している戦闘兵器のデータらしい。

（これは……凄い。ほぼ全てのUCからUC以外の時代のMSの開発データが置いてある。）

モニターにずらりと並んだMSの開発データに目を通す。様々な性能のMSが全て開発できるということは無駄な設計などをせずともいいから助かるだろう。ただし、問題は……

（だが、今はMSを生産できる資金がない……。）

そうなのである。MSを生産するのに必要なキャピタルは現在0だ。この状態では宝の持ち腐れである。

（まあいい……。俺にはフェニックスがある。当分は十分だろうな。）

そう気を取り直し、今度は基地の現在戦力に目を通す。そこには僅かながらもしっかりと戦艦とMSは保有してあるようだ。

戦艦にはMS4機。格納庫にはマークのフェニックス1機だけ。格納庫はMS約100機搭載可能。

そして、どうやら気が付かなかったが最初にいた格納庫の隣がどうやら戦艦ドッグだったらしい。

戦艦ドッグでは、約3隻の戦艦がおけるようだ。

（なるほど、今現在は一隻の戦艦があるから後2隻生産可能か。だがMS以上にコストがかかるから、コレも当分はいいかもしれん・・・）

そう判断しマークは戦艦の評細を調べるために再びコンソールを操作する。そして戦艦と中に搭載されてあるMS4機のスペックが表示された。

「なっ!？」

思わずマークは驚いて声を荒げてしまう。
そこに映し出されていたのは

「キ・・・キャリーベース・・・？」

その戦艦はもうすでに旧式とされていて、むしろ輸送機と言った方がいいかもしれない。

オレンジ色の戦艦キャリーベースであった。

「よりによって、この艦とは・・・。まあ大気圏内でも活動できるし、旧式とはいえ優秀な部類なのだな。」

かつてマークも最初の頃はこのキャリーベースを母艦に戦い続けていたこともあった。その懐かしい思い出もあった為、性能の差はあれどそれほど気にはしなかった。

「さてと・・・搭載されているMSは？」

再び操作を続行し、搭載されているMSの情報を映し出す。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

マークは今度こそ絶句してしまった。何故なら搭載されていたMSは

RX-78 ガンダム

RRf-06 ザニー3機

「ザ・・・ザニーだと・・・。」

地球連邦軍が最初期に開発されたMSザニーがそこにあった。

プロローグ02（02話）（後書き）

プロローグなのに、この無駄に長い文章な何なんでしょうね？
もっとコンパクトに内容をまとめられる文才がほしいです。

一応、長くなつてしまいましたのでここらで一旦区切って続きを投稿したいと思います。

プロローグが次の第3話で終わって本編に入るのが4話からかも・・。

後、これ書いている現在かなり眠気と格闘しておりましたので途中おかしくなってる分や間違えてる字があると思います。

こちらでも最後は確認いたしますが、皆様も気付いたら指摘の方を願います。

お読みになりありがとうございます。

プロローグ3（03話）

ザニー

地球連邦軍が最初期に開発したMSで、ガンダムとは違う経路で開発が進められた機体でもありジオン軍MSのパーツを使い完成された機体である。

しかし、当時の連邦軍のMSに関する技術は低く、中途半端な設計となつてしまい動作不良や操作性の悪さなどが相まって正式採用されなかった機体だ。武装は頭部の60mmバルカン砲と120mm低反動砲のみで120mm低反動砲は後に連邦軍で開発されたボールやガンタンクにも正式採用されている。

そしてRX-78ガンダム

宇宙世紀の人類でこの名を知らない人はいないだろう。ジオン軍のMSに対し連邦軍が対抗すべく計画したV作戦で開発された機体であり、後にガンダム神話を生み出した連邦軍最強パイロット、アムロ・レイが始めて搭乗した機体である。

マークはこれらの機体を見つめながら考える。

（ファーストガンダムはともかく、まさかザニーが配備されているとは……。たしかザクと同程度の性能は持っているが頻繁な動作不良と操作性の悪さで実戦配備されることはなく、操縦訓練でしか使用されなかった筈だ。やれやれ……。どうせならジムでも置いてくれていたらいいものを……。）

マークはそう嘆くが、言っても仕方がない。気を取り直し、また色

々と調べる為にモニターを操作する。

やがて、基地の状況は大体把握したのか今度は世界の情勢を調べる為に基地のネットワーク通信を立ち上げた。しかしシステムがオフラインとなっており、外のネットワークにアクセスできない。

マークは何かネットワークをオンラインへと立ち上げようとしたが努力も空しくオンライン接続が出来ることはなかった。

（どうやってもアクセスできないか。これだけ大きな基地ならネットに接続することくらい訳がないはずだ。まさか、ここが特別なだけで外の世界はまだインターネットが普及していないとかそんな事は無いと思うが・・・。）

（分からんのなら仕方ない、このままここにいても状況は変わらんならしばらくはここを拠点にして、基地を飛び出し自分で調べるしかないな。）

幸いな事にさきほどの情報から食料とMS資材は十分にあることが分かっていた。ある程度、簡単な機体の整備なら自分でもできる。それに加えフェニックスはナノスキン装甲による自動修復でパーツの劣化なども当分は大丈夫であろう。

マークは司令室を出て、格納庫へと戻るため通った道に戻る。途中、食堂で非常食品として何個かレーションを持ち出しパイロットスーツのバックパックに詰め込む。

格納庫へとたどり着き、フェニックスに搭乗する前に戦艦ドッグを見てみようと思い、ドッグへの入り口へと向かった。

ドッグにはキャリーベースが静かに佇んでおり、かつてこの艦で戦い抜いてきたことを思い出す。

（懐かしい……。あの頃の俺はまだまだ弱くて、毎日生き抜くの
に必死だったな……。）

昔のことを思い出しながらマークは懐かしむ目でキャリーベースを
見つめていた。

（しかし、艦があるのはいいがこれを動かせる人員がいないな。艦
だけではない。俺一人だけで、この基地を運用することは無理だ。
それこそ戦争が起こり、この基地が見つかれば確実に防衛は無理だ
ろう。）

いくら高性能なフェニックスといえど、たった一機で基地の防衛は
無理だろう。戦争というものは、一機の高性能機より大量の汎用機
だ。どこぞの中将も『戦いは数だよ兄貴！』と叫んでいた為、間
違いない。

基地の事はこれから考えるとして、マークは戦艦ドッグを出てフェ
ニックスへと搭乗する。この世界を調べる為に。

フェニックスを動かし基地の外に出る為、マークは昇降機へと向か
う。機体の重量を感じした巨大な昇降機は自動で起動して発射口ま
でたどり着き、やがて発射口のシャッターが大きく開き薄暗かった
カタパルトに大きな光が差し込みマークは目を細めた。

（なるほど、この海中基地の上は孤島か。島一つをまるまる基地に
改造した形だな。）

この世界に来て初めての外の景色を眺めながら、岩壁からくり抜い
たように出てきたフェニックスの腰を落とし、発射体制に移行する。

「さて……。俺が迷い込んだこの世界はどうなってるのだろうな。俺の生き方を見つける目的ができればいいのだが……」

マークは静かに呟き、そつと目を閉じる。やがて心の準備ができたのか、力強い意思をした表情となり、機体のペダルを踏み込みながら叫ぶ。

「マーク・ギルダー！フェニックスガンダム発進する！！」

カタパルトから飛び立ち、フェニックスは大空へと舞う。そして、ここからマークの新たな戦いの歴史が始まるのであった。

ブローグ3 (03話) (後書き)

MSの設定はWikiを参考にさせてもらいました。
とりあえずこれでブローグは完了です。次の話から本編へと移りたいとおもいます。

自分なりに考えたオリジナルですが、よろしく願います。
指摘・感想お待ちしております。

目的と決意（04話）（前書き）

タイトルを若干、変更いたしました。
オルタ
Aの意味はAです。

目的と決意（04話）

西暦1997年2月4日 AM08:05

日本領域上空

基地を飛び出した直後マークは目的地も決めず、ただ日本領土へと向かっていった。この国の制空権のレーダーに掴まらないようにフェニックスの周囲にミノフスキー粒子を散布しながら機体の望遠レンズに映るカメラを確認していきながら進んでいく。ステルス性の高いフェニックスなら、ミノフスキーを散布せずともレーダーには映らないと思うが念には念を入れるに越したことはない。

それに恐らくこの世界はミノフスキー粒子はまだ発見されていないのだろう。ミノフスキー粒子が発見されたのは宇宙世紀になつてからだ。その証拠に機体が感知したミノフスキー粒子値は行動に全く支障をきたさないレベルの数値を示していた。

やがて望遠レンズは日本の領土を映し出しマークは機体を上空で一時停止し、送られてきた映像を観察する。田舎の港町だろうか？海沿いにまばらに建てられた住居があり、漁船が6隻ほど停泊している。

しかし、漁師達はまるで生気が感じられず何かに絶望したような雰囲気漂わせていた。

マークは機体を近くの森の中に忍ばせて、パイロットスーツから機体を持ち込んでいた私服へと着替え、情報収集の為にその漁村へと足を運ぶ。

やがて村の中に入ると近くのクーラーボックスに腰掛けて煙草を吹かしていた中年の男性へ声をかけた。

「すまない。少し話をいいだろうか？」

そうマークが声をかけると中年が振り向く。しかし、マークは名前も見た目も日本人ではない。中年はマークに警戒心を含んだ声で返答した。

「ああ？あなた・・・国連の人間か？なんでこんな田舎町に国連の人間がくるんだ？」

「（国連？）いや、俺は国連とやらの人間ではない。少し日本を旅していてな、この村に寄らせてもらった」

その言葉を聞いた中年はマークをあからさまに怪しい目で睨み付ける。

（なんだ・・・？雰囲気が変わった・・・？警戒するのは何となく分かるが、さっきの発言でここまで露骨に警戒心を膨らませるだろうか？）

「あなた・・・、旅をしているって？このご時勢にか？帝国内が政威大將軍の元、まだBETAの侵攻から守られているといっても、安全ではないのだぞ？それに今は韓国とソ連でBETAがハイヴを造っているって噂じゃないか。それが本当なら次は確実に帝国にBETAが侵攻してくるぞ」

（ベータ？ハイヴ？一体なんだそれは）

マークは中年の言葉を理解できないでいた。かろうじて分かった事はこの世界はベータとやらと戦争をしている。ベータがこの国の機関なのかは分からないが、それに対し各国もベータと紛争してい

る。

それに今は帝国内もベータの侵攻に脅え、そんな時期に旅なんかをする命知らずはいないらしい。

マークは内心、言葉を間違えたかと中年に分からない程度に顔をしかめるも直ぐにいつものポーカーフェイスに戻り、言葉をつむぐ。

「いや、すまない。言葉が足りなかったな。俺はフリーのジャーナリストでな、各国のベータに対する人々の生の声が聞きたくて取材をしながら色々な国を歩き回っていたんだ。よければご主人、俺の取材に協力してくれないだろうか？」

マークはそう言い、懷にしまっていたメモ帳とペンを取り出す。とりあえず、この状況から逃れる為に戦場ジャーナリストと偽って情報を集めようとした。

（メモと書き物を常に携行しておいてよかった。コレでなんとか納得させ、この世界情勢を聞き出せばいいが・・・。）

マークはこれからどう言葉を発しようか考えながら中年を見つめると中年は少し目を大きく見開いた後、マークを馬鹿にするような感じで激しく大笑いした。

「あつははははは！！こりゃいい！！今時ベータについて聞きたいとかそんなバカな事を言う奴がいるとはな！！いいぜ、兄ちゃん！俺でよければ答えてやるよ！BETAをどう思うかだって！！？決まってる！全部ブチ殺してやりたいよ！あいつらが地球に現れたおかげで、この国も世界も全部メチャクチャになっちまったんだ！！俺の息子もな、帝国兵の衛士だった！だが中国に増援として派遣された後にBETAに殺されたんだ！聞いた話じゃ戦車級に喰い

千切られたんだって話だ！分かるか！やつらに大切な一人息子を殺された俺の気持ちか！！妻も重い病気に掛かった！だが薬があれば助かったんだ！それなのに薬が支給されずに死んじまった！医療品の生産が追い付いていなかったんだってよ！！俺がすべてを失ったのも全部あの気色悪い化け物共のせいだ！！！」

中年はハアハアと荒い息を吐きながらマークを睨み付ける。叫んでいるうちに感情が高ぶったのか目尻には涙が浮かんでいた。

マークはそんな中年の態度を見て若干、後悔の念に囚われていた。

（この主人の話を聞いている時、様々な感情の念が伝わった……。憎しみ、憎悪、殺意……。それほどまでにこの世界は追い詰められているのか……。だが途中、気になったことがある。『あいつらが地球に現れた』これはどんな意味だ？）

ニュータイプとして覚醒し、人の感情を敏感に察知できるようになったマークはこの中年の途方もない怒りや悲しみを感じた。そんな人物に軽薄な質問をしてしまった自分を恥じた。

中年は少し落ち着いたのか息をととのえて、再びクーラーボックスへと腰を落とす。マークはそれを静かに見ていた。

時間にして数分たった後、しばらくお互い何も口を開かない状態が続いていたが、中年はマークに視線を移しマークに声をかけた。

「俺もな、今はこんな辺鄙^{へんぴ}な村に住んでいるが、昔は帝国の衛士だったんだよ……。この国を守る為にBETAとずっと戦い続けていたんだ……。」

マークは中年の独白を静かに聴く。

「本当は殿下を守るために斯衛に入隊したかったんだけどよ……俺の実力じゃ無理らしく試験に何回も落ちたんだ……。それで結局、帝国陸軍の戦術機部隊に腰を落ち着かせたのさ……。」

「だがよ……ある日、訓練中にドジ踏んじまって大怪我さ……。衛士生命を絶たれるくらいなの……。情けないよな、BETAと戦って怪我したんじゃないかって訓練で注意を怠って怪我しちゃったんだぜ……。」

そう言い中年はマークから視線をずらし、どこか遠くを見る様な目で言葉を続けた。

「それで衛士を辞めて今度は整備兵になったんだけど、殿下に申し訳なくてな……。国の為にすら役に立たない俺が軍にいていい訳ないって思ってた軍を辞めたんだ……。」

「やがて当時、付き合ってた女と結婚して息子も生まれたよ。大きくなって帝国軍に入隊して、衛士になったって報告がきた時は嬉しかったね。自分の後を息子に継げたような気がしてさ。」

「結局、息子はBETAに殺されちゃったがな……。妻にも先立たれて何も失う物は無くなっちゃった。そして、この村に引越して生活するようになったんだよ……。」

中年は再びマークへ視線を戻し、ゆっくりと言葉をつむぐ。

「息子も今頃、生きていたら兄ちゃんと同じくらいの年齢になって

た頃かな？孫の顔が見たかったけどもうそれも叶わねえ。．．．な
あ兄ちゃん、あんたも色んな人から話を聞いていたのなら俺のよう
な気持ちの人間なんて腐る程、見てきただろ？いや、俺以上にB E
T Aを憎んでいる奴なんて世の中には腐る程いるぜ。なにせ祖国も
家族も無くした人がこの世界には大勢いるんだからな．．．。」

中年はひとしきり喋った後、懷から煙草とライターを取り出し火を
つける。

煙草を吸い込み、紫煙を吐き出し再びマークに問いかける。

「兄ちゃん、悪い事は言わねえ。ジャーナリストなんか辞めちまえ。
この世界でB E T Aについて聞くのなんざ人の心の傷をすり潰すよ
うなもんだ。兄ちゃんも生まれた国があるんだろ？兄ちゃんが何処
の生まれかは知らねえが祖国を取り戻したり、まだ存在してるなら
？栄させたり色々とできることがあるんだぜ？今の年齢じゃあ、軍
に入隊して衛士になるのは難しいかもしれんが、自分と国の為にで
きることをするほうがよっぽどいいぜ。少なくとも今、生き残って
いる奴らはそう考えながら今を生きているんだ．．．。」

「．．．．．」

マークは中年の言葉に静かに耳を傾けていた。
これ以上、この中年から聞くことはないだろう。B E T Aという存
在が憎まれているという事が分ければ十分だ。

「貴重な話、聞かせてくれたことを感謝する。そして、嫌な事を思
い出させてしまつてすまなかつた。申し訳ない。ご主人」

中年に対して謝礼と謝罪を同時に放ち、背中をゆっくり曲げる。

そんな言動を見て中年は、ふつと薄っすらと笑い、クーラーボックスの横に置いてあったハンドバックから何かを取り出してマークに渡した。

「ほら、やるよ」

そう言っただけで中年がマークに渡したのは一つの真っ赤なリンゴであった。

「これは・・・？」

「兄ちゃんにやるよ。今時、珍しい天然のリンゴだぜ。合成リンゴじゃないからな、味も格別だ。」

マークにとって、ごく一般的で何も珍しくはないリンゴ。だが中年の言葉から考えるにこの世界ではこのリンゴ一つでも大変貴重なのだろう。

「なぜ、これを自分に・・・？」

「さあ、なんでだろうな。自分でも分からんよ。だが、あんたが俺の話聞き終わったのと同時に何かを覚悟したような表情をしたかな。これはその饑餓のような物と思ってくれればいいさ。」

ニッと中年はマークに笑う。

「覚悟・・・？」

「ああ、こう見えても元は軍人だぜ。あんた、今から戦場に行くよな・・・戦う男の目をしていた。」

「ふっ・・・そうか。では、ありがたくいただきます。」

マークも中年に対して笑い返した。

「ああ、死ぬんじゃないぞ。」

「もちろんだ。所で、さっきの話ではベータは韓国とソ連にハイヴとやらを造っているらしいな？」

「ああ、そうさ。更に詳しく言うとアムール州ブラゴエスチェンスクと江原道鉄原郡に建造中だってよ。今頃はソ連軍と統一中華戦線軍が戦っているだろうぜ。」

「・・・そうか。貴重な情報感謝する。では、俺はこれで失礼させてもらう。」

マークは中年に改めて礼をいい、背中を向ける。中年はそんなマークを姿が見えなくなるまで見つめ続けた。やがて、マークの姿が消えると立ち上がり背筋を伸ばしながら、右手をピンと伸ばして敬礼の動作をする。

そして小さく呟いた。

「死ぬなよ・・・兄ちゃん・・・。」

フェニックスの元へと戻ったマークはさっきまでの話を整理した。

（どうやらこの世界はベータという化け物に追い詰められている。そして、ハイヴというのは恐らく奴らの基地みたいなものだろう・・。そして俺がここに来る前に聞こえた助けを求める声。これはこの世界の人達の願いなのか？だが、俺一人でそんなことができるだろうか？ベータとやらがどんな存在なのかは分かんが、俺の目的は決まった。）

パイロットスーツへと着替えなおしたマークは力強く心の中で宣言する。

（ベータを殲滅する！それが俺のここに来た目的だ！！）

フェニックスを上空へと飛ばし目的地へとマークをセットさせる。

「さあ行くぞ！！」

大空へと舞うフェニックスは戦場へと向かう。この時代の戦争で自分はどうなるのか？それはまだ分からない。だが、戦争で人が悲しむのは誰だって見たくない。これ以上、悲しみを増やせないためにマークは戦う決意をする。

途中、中年からもらったリンゴをかじりながらマークは目的地へと向かっていった。いつも食べなれている普通のリンゴ。だが今、食べているリンゴはいつも以上に甘く感じていた・・・。

目的と決意（04話）（後書き）

前書きでAはオルタって意味と述べましたが、ALのストーリーが絡んでくるかは分かりません（汗

次あたりで誰か原作キャラだす予定です。
お読みになりありがとうございます。

接触（05話）

ソ連 アムール州

日本を発ちベータの情報を得るために一路、ソ連へと向かう。
ソ連領域内へと入ったが、マークが目に移す景色は荒廃とした赤黒い何もない大地が見えているだけだった。

「ひどい有様だ……。さっきから似たような風景しかない。これもベータとやらの戦争の被害なのか……」

草木の生えていない死の大地を眺めながらマークは顔をしかめる。

（この有様……。自分の想像以上に酷いものかもしれない。）

ここまで来るのに捨てられた民家や廃都市などは若干であるが見つけることができた。だが、機体から降りて詳しく調査を行っても人の姿はもちろん確認できず、その姿から長い間、捨てられている事が分かったただけだ。

（ベータ……。一体どんなヤツなのだ……。）

マークが考え事をしながら、機体を飛ばしている。そして、しばらくすると前方数十キロ向こうの地点でフェニックスのリーダーがあるものを捕らえた。

（これは……。熱源反応を感知！この国の軍隊か！？それに、なんだこの大量の生態反応は！？）

フェニックスが捕らえた高性能なレーダーは僅かな熱源反応、そして大量の生態反応を捕らえマークへと警告をだす。生体反応の数は多すぎて一体どれくらいいるのか判別がつかない。少なくとも数百人はいるであろう。

だが、おかしい。レーダーの動きを見るに、大量の生体反応はまるで凄まじいスピードで熱源反応へと向かってきている。それにこの早さだと時速数百キロはでているようだ。

やがて、マークのフェニックスも捕らえたレーダーの映像を受信することができ、マークは早速、受信された映像を見てみる。すると、そこにはマークの常識を覆すような映像が流れ込んできた。

（なんだこの生物は！？生態兵器！？もしかコレがベータというやつか！？）

映像には見るもの全てが目を背けたくなるような気味の悪い生物が映し出されていた。巨大な生物は太い二本の腕に歯を食いしばったような尻尾を持つサソリに似た生物、硬い甲殻に覆われている6本の足で凄まじい速さで突撃している生物。そして人の頭と腕を生やした四足歩行や像の鼻をもった様な奇妙な形、薄い桃色の肌をした人の上半身に気色悪い下半身をもった小型の生物を見たマークは嫌悪感を隠しきれなかった。

（なんとも気色悪い奴らだ。あんなもの今まで見たことも聞いたこともない。それに戦っているのは恐らく、この世界の軍隊と兵器。だが驚いた。まさかこんな時代にすでに人型兵器が存在しているとは・・・）

マークの目に映ったもう一つの物、それはこの世界の・・・国からしてソ連軍だろうか？Su-27ジュラーブリク5機と数十車両で

構成された戦闘車両と輸送車であった。

状況から見て撤退戦だろうか？前方を最大スピードで駆け抜けながら車両は走り、戦闘車両は上部についていた軽機関銃を後方のベータ達に向け発砲している。

それに追従し、SU-27も手に持っているマシンガンを連射しながら車両郡に付き従っていた。

だが、それでも劣勢だろう。双方の距離はだんだんと追い詰められてきている。いずれ追いつけられて全滅させられるだろう。

マークは機体の高度を地面スレスレまで下げ、近くの岩壁に隠れてそれを冷静にみていた。相手軍のリーダーに補足されないようミノフスキーを周囲にばら撒くのを忘れない。

マークのいたUCではミノフスキーを散布したら、機体についている粒子値測定器が反応し、近くに敵影がいる事を教えてしまうようなものだが、ミノフスキー粒子値を計測できないこの世界では直接、目視で機体を確認されないかぎりは大丈夫だろう。もっとも今の状況を見ていると周囲を確認するような余裕はまずないだろうが。

そうしているうちにSU-27の内、一機の動きが停まってしまう。燃料切れか、バーニアに異常をきたしたか、理由は分からないがそれが致命的だっただろう。突進してきた甲殻に覆われた生き物。マークはまだこの時、名前は知らなかったが突撃級の突進を受け、大破してしまった。

コックピット直撃だ。爆発こそ起こっていないが、あの様子では恐らくパイロットは助からないだろう。

これで機動兵器は残り4機。だが、味方も友軍がやられたのを気にしている余裕はない。機体を再編成し、ポジションを素早く変えて迎撃を再開する。

（なかなか統率がとれたチームだな。有能な指揮官なのだろう。だ

が、それでも全滅は時間の問題か・・・。）

マークはこれからの事を考えていた。先ほどから戦闘を見つめているが、あのベータの攻撃手段は恐らく近接攻撃のみ。その証拠に遠距離からの攻撃は一切、放ってこず相変わらず全匹、突撃を繰り返しているのみだった。

（遠距離攻撃をしてこない・・・ということは恐らく対空攻撃の手段もないのだろう。それならフェニックスで楽にやつらは殲滅できる。だが今、この戦闘に加勢していいものだろうか？）

確かに空を飛行でき、なおかつ遠距離武装に恵まれているフェニックスなら簡単にBETAは殲滅できる。奴らの前進速度にあわせながらファンネルやライフルを撃ち続けていれば数は多くともそれほど苦労はしないだろう。

だが問題はその後だ。あの軍にフェニックスを見られたら色々と面倒くさくなってしまう可能性は捨てきれない。

前の世界みたいに機体に関してはスルーしてくれた方が非常に助かる。

なにせずっとあの戦闘での機体の動きを見ていたが、マークから言わせてもらえば非常に性能がよろしくない。恐らく一年戦争で活躍したグフやジムと同程度がそれ以下といった所だろう。

かりにあれが量産機でガンダムみたいに超高性能機も開発されていたとしても、あの機体の性能から考えるにフェニックスには遠く及ばない。

もしフェニックスのことを問い詰められたら、最新鋭機です。と言っても信用してもらえないのは難しい。それほどまでにこの時代の機体と照らし合わせればフェニックスはオーバーテクノロジーであった。

マークがしばらく考えていると、また一機のS u - 27がB E T Aに取り囲まれる。取り囲まれた一機は友軍の援護を受けるも、一体の戦車級にマシンガンを構えていた方の腕をとられる。引き千切られた右腕を犠牲に最後の抵抗と言わんばかりに左手でナイフを構え、戦車級に突き刺した。だが、B E T Aはまだ無数に存在しており、中破したS u - 27の元へどんどん押し寄せてくる。そしてフェニックスの無線機からは先ほどから通信を傍受しており、無線機からはパイロットの悲鳴が聞こえ続けており、生への願望が強く感じられた。

その光景を見ていたマークはついに決心をする。

（今後のリスクを考えるならあの部隊が全滅した後でB E T Aへ接触すべきだ。だが同じ人間として、ただ黙って見ているのは気が引ける。奴らに加勢するぞ！）

決断したマークの行動は早かった。ブースターを一気にふかしフェザーファンネルを展開する。そしてファンネルで今まさにS u - 27を食い殺さんと群がっていたB E T Aに正確無比な射撃で殲滅する。

さらに上空からビームライフルとメガビームキャノンと同時に連射しながら残りのB E T Aを片付けていく。

「な、なんだあの機体は！？」

「分かりません！見たことのない戦術機です！！それにあれはレーザー！？」

突然の乱入者に衛士達は驚きと疑問の混じった声を上げるが、マー

クはその問いには答えない。ただ黙ってBETAを殲滅するだけだった。

加勢はするが、この軍の味方になった訳ではない。戦いながらBETAの情報を集めたらマークはすぐに退散する手筈だった。

「その戦術機！！何者だ！？いつたい何処の所属だ！！？」

回線のオープンチャンネルを開きながら衛士の一人が誰何する。だが、マークはそれに答えることなく周囲を飛び回りながら戦闘を続行するだけだった。

（戦術機？なるほど、それがここの機動兵器の名称か。それにやはりやつらは対空武器をもっていない。ただ地を走りながらフェニックスの後を追っているだけなら殲滅は楽勝か）

先程から大声でこちらに呼び掛けているパイロットから得られた情報などを整理しながらSu-27を援護する様、周りを旋回しライフルで要撃級の一体を狙い撃つ。

ビームが命中した要撃級はその硬い装甲を熱で溶かしながら動かなくなった。

（脆いな・・・）

フェニックスの火力はメガビームキャノンと最大の必殺技であるバーニングファイアを除き、それほど高い訳ではない。フェザーファネルも威力の面においては、ややサザビーなどに比べたら劣るだろう。

ビームライフル程度では一年戦争初期辺りのMSを一撃で仕留められても、その後からビームコーティング技術が進んでいったUC後期あたりでビームライフル一撃で相手を仕留めるのは苦労したもの

だった。

「おい！！その戦術機の衛士！聞こえているのか！！？」

いい加減、通信の呼び出しがうつとおしくなり通信のスイッチを切るうかと考えていたその時、マークをずっと呼び続けていた戦術機の真後ろに突撃級が向かってきていた。

「副隊長！危ない！！」

そう言われ副隊長と呼ばれた男は背後を確認する。するともう目の前に突撃級が迫ってきており、男は死を覚悟した。

（回避は間に合わない！？クソッ！こんな所で・・・隊長すみません・・・！）

心の中で自分の隊長へ謝罪し、男は来るべき衝撃に目を瞑る。瞬間、ビューンと聞いたことのない音が自分を掠めていったような気がした。

いくら待っても突撃級の衝突が訪れないのを疑問に感じながら男は目を開ける。すると目の前には大きく穴を空け表面から内部まで焼き焦げた後のある突撃級の死体が横たわっていた。

「これは・・・！？」

男は再び、自分の背後を振り返った。残りの戦術機達も男と同じ場所に視線を移す。そこにはビームライフルを片手で構えた動作で佇んでいたフェニックスがいた。

「一つの事に夢中になり、周囲が見えなくなってしまうと今の様に

戦場ではすぐに命を落とすことになる。覚えておくんだな」

謎の戦術機から、ようやく発せられた声により男はハツとして辺りを見回す。そこに既にBETAの反応は無く、数百匹といった死体が転がっているだけだった。

周囲の安全を確認し、やっとコンタクトを取れた謎の男と接触する為に再び通信で呼び掛ける。今度はあくまでも冷静に。

「先程は危ない所を助けてくれてありがとう。貴官の援護に感謝する。おかげでBETAから逃れる事ができた。私はソ連陸軍部隊ジャール大隊副隊長アナトリー・ブルラコフ少佐だ。貴官の属する部隊と名前をお聞かせ願いたい」

アナトリーと名乗った男に対しマークは内心しまったと考えていた。

（やはりこの世界では自分と機体は干渉してしまうか……。迂闊だったな。奴らに対しこちらから発言をしてしまったのは）

戦場で停まり周りが見えなくなってしまった相手を見て、ついマークは部隊を率いていた癖で注意を促してしまっていた。

だが、もう遅い。相手と接触してしまったのなら仕方ない。適当に切り上げて、ここを去ろう。

「・・・・・・・・・・。」

やはり答えられないか……。アナトリーは内心やはりと心で呟き改めてフェニックスを見つめる。機体色は赤と白で構成されており、どの戦術機にも当てはまらない鳥を思わせるフォルム。

さらに長時間の飛行ができ、一番驚いたのはレーザー兵器を多数装備していること。ほかにあ的小型の周囲を飛び回るレーザー発射

装置にも驚いたがアメリカの新型だろうか？

実戦データを取る為に、最近ハイヴが建造されているこの地にやってきて自分たちと鉢合わせたのだろう。

恐らく、アメリカかどこかの国の新型ならあの戦術機だけでなく、どこかに本部があるか機体のデータ記録で自分たちと接触してしまったのはいずればれるだろう。

最悪、消されるかも知れない。だが、それなら自分達を見捨てて全滅した後にデータをとればよかったのではないだろうか？結果的に助かったが向こうの考えている意図が分からない為、こちらも迂闊な事はできない。

「その機体は・・・やはりアメリカ、国連の新型兵器なのか？」

そんな事を言っても答えてくれる訳がない。駄目元で言ったことだったけど自分の予想外の返答が返ってきた。

「すまないが、こいつに関しては詳しくは答えられない。だが、これは国連とやらの開発した兵器ではないし何処の国の機体でもないよ」

男からの予想外の返答にアナトリーは驚き目を見開く。

（国連ではなく、何処の国の兵器でもないだと！？どういうことだ！？）

やがて話は終わりだと言わんばかりにフェニックスは上昇を始める。ここを去ろうとしていたフェニックスに慌ててアナトリーは問い掛ける。

「待ってくれ！！その戦術機がどの国も開発していないのだとしたら、お前自身で造った物なのか！？それとも国に所属していない

完全に独立した機関が開発したものなのか!？」

「そうだ」

前者と後者のどちらに對して肯定の返事をしたのかは分らないが、男自身はどの軍にも所属していない。それならとアナトリーはする様な思いでマークへ話しかけた。

「頼む！お前がどの国にも属していないのなら俺達の隊長を助けてくれ！」

「隊長？」

アナトリーの急な依頼にマークは疑問の声を上げる。

「そうだ。俺達ジャール大隊はこの地で建造されているハイヴの調査でやってきた。だがBETAの数がこちらの予想以上に上回っていて莫大な被害を受けた。俺達はハイヴの調査は諦め撤退を開始した。しかしBETAが無数に押し寄せて友軍は徐々に数を減らされていった・・・」

そこまで言つてアナトリーは顔を悔しそうに歪ませる。仲間がBETAに殺されていき無念を感じているのだろう。

「そしてデータだけでも持ち帰ろうと隊長達が殿を務め俺達、最小の兵力を残して撤退を命令した。そして撤退途中残りのBETAに追いつかれそうになった時に現れたのがお前だ」

「・・・なるほどな」

どうやらまだ先で彼らの本隊が戦っているらしい。だが、これまでの状況と時間を考えると生存は絶望的だろう。

「そこで俺に助けてほしいという訳か・・・」

「そうだ、見ず知らずのあんたに助けて欲しいと言うのはお門違いと分かっている。だが、あんたのその戦術機なら生き残ってるやつ等も助けられるかもしれないんだ。頼む！」

「・・・・・・・・」

アナトリーの言葉にマークはしばし考える。そこまで加勢してやる義理はないが一度、彼らを助けた事だ。なら生き残りを探して生存者がいたら助けてやり恩を売っておくのもいいだろう。

「分かった。引き受けよう。生き残りがいたらお前達の元へ連れ帰ってきてやる。しかし既に全滅していて生存者が皆無だった時は俺は帰らせてもらう。いいな？」

「ああ、ありがとう。それで十分だ」

マークの言葉にアナトリーは大きく頷く。もし全滅していたのなら彼は帰ってこないと言った。その時はせめて遺品だけでも回収して欲しいと思ったが、ただでさえ関係のない彼に無茶な頼みをしたのだ。これくらいは仕方ないだろう。

「では行ってくる。生存者を救出した場合の合流先はどうする？」

「それならこの周波数に連絡を入れてくれ。俺個人に繋がる通信だ。合流ポイントを指定してこちらから向かわせてもらう。その戦術機

を大勢に見られたくはないだろう？」

「そうだな・・・気遣いに感謝する」

送られてきた周波数を確認しながらマークは礼をいう。本来なら助けにいく条件として、こちらの事は一切口にしないと云うつもりだったが既に彼ら大勢の人間に見られているし、軍人として上からの命令に一個人で約束した事など関係ない。話せと言われれば話すしかないのだろう。

「では早速行ってくる。時間もないからな。大隊の位置は先程、周波数と送られてきたこの地点であっているな？」

「ああ、そうだ。そして隊長の名前はフィカーツィア・ラトロワ中佐だ。頼むぞ！それと余計な世話かもしれないが、あの地点で多数の光線級が確認されていたから絶対に空は飛ぶなよ！？こちらには光線級がいなかったから自由に飛び回れたが、次はそうはいかないぞ！」

アナトリーはマークが既に光線級の存在を知っているものとして話していたが、BETAとの遭遇はこれが始めてであったマークとしては大変貴重な情報であった。

（なるほど・・・どうやら対空攻撃を持つベータは存在するようだ。この場にはいなかったようだ、まだ俺の知らない複数のベータがいるのかも知れん）

「情報感謝する。それとほかに気をつけることはないか？」

「そうだな・・・。ハイヴは現在まだフェイズ1とは言え、BET

Aの巢であることは間違いない。光線級より厄介な重光線級もいるかもしれない。それと要塞級と出会ったらなるべく威力の高いレーザー兵器を使い！そしたら体内にいる小型種もまとめて倒すことができる！」

マークの知らない情報を次々とアナトリーは話してくれる。敵を知ると知らないのでは大きく戦い方が違ってくるだろう。

マークは得られた情報を整理しながら、フェニックスをいよいよ発進させる。

一応、光線級とやらの対策として高度は地面すれすれで飛行している。マーキングされた箇所へと向かっている中、フェニックスが大量の生命反応と僅かな熱源反応を捕らえた。

どうやら生き残っている部隊がいたのだろう。マークはすぐに援護できる様、フェザーファンネルをあらかじめ展開させておく。

映像が確認できる所までくれば、先程見たSu-27の他に見慣れない戦術機が見える。その機動性も他の戦術機を凌駕しており、仲間をかばう様に戦い続けていた。パイロットはエースといえる実力をもっているのだろう。

だが、やはり物量の前には適わなく徐々に追い詰められているようだ。急がなければ間に合わないと判断したマークは浮遊させていたファンネルを一気にBETAに向けて放射する。

戦術機達を取り囲んでいたBETAはすべてファンネルにより殲滅させられた。

やがてファンネルを格納し、指揮官と思われる人物に通信を入れる。

「あんたがラトロワ中佐か？アナトリー少佐に言われ、あんた達の援護に来た」

「誰だ！？貴様は！？」

「名前は言えん。だが一応、味方とだけは言っておく」

「アナトリーと言ったな？ブルラコフ少佐達は無事なのだな！？」

「そうだ、俺が来たときは大分、被害を受けていたようだがな。とりあえず話はここまでだ。生存者の救出を依頼されたからには、あんた達を無事に逃がす必要がある。死にたくなければ、あんた達も手伝ってくれよ？」

そう言い残し通信を切ったマークはビームサーベルに持ち替えて、単身BETAの群れへと突撃していった。

接触（05話）（後書き）

オリキャラのアナトリーさんですが、ちよろっと出て終わりだと思います。

ジャーナル隊で副隊長みたいなポジションの人って登場してないですよね？

次回は戦闘描写に入りますが、他の皆様が書かれているよう上手く書けるかスゲー不安です。分かりにくい描写でしたら、感想やメールなどでもいいので指摘してください（汗）

06話（前書き）

06話

非戦闘員とハイヴのデータを収集した車両部隊を逃がし、どれくらいの時間がたっただろうか？

殿を務め、副隊長のアナトリー少佐以下3名を護衛としてつかせ自らは大隊を率い、BETAの足止めをする。

しかし、こちらの予想以上の数のBETA達は未だに途切れる事無く無限に湧いてきている。

当初ジャール大隊に与えられた任務はアムール州にBETAが建造し始めたブラゴエスチェンスクハイヴの偵察任務であった。

現段階でフェイズ1とは言え無視はできない状況。これ以上、祖国を荒らされたくはないソ連軍にとって見逃せない出来事であった。作戦開始時は周囲のデータをとりつつ順調に作戦は遂行できていた。しかし、ハイヴへ接近していくと突如地面からフェイズ1では考えられない数のBETAが押し寄せてき、一気に劣勢にへとたたき倒してしまった。

この状況に対しジャール大隊を率いるフィカーツィア・ラトロワ中佐はBETAの進行を食い止めるべく収集したデータを積んだ車両部隊を撤退させ、自身とジャール大隊を囫として立ちはだかった。

しかし、それも長くは持たなく彼女の部隊は着実に消耗していつてしまい、ジャール大隊はもうすでに半数以上の戦術機が破壊され壊滅的へと陥ってしまっている。

それでも諦めることなく、祖国の為にわが身を犠牲としBETAと戦い続ける。

「ジャール01より各機へ！現在の被害状況を報告しろ！」

「こちら02、機体の異常は無し！！ただし弾薬の消耗率が8割を切りました。もう持ちません！」

「05！突撃級の突進を喰らい脚部が破損！身動きがとれません！」

「こちら06！要塞級と交戦中！援護を・・・ウワアアア！！」

次々と報告を入れてくる部下たち。しかし、どれもいい状況ではなく彼女は顔をついしかめてしまう。

（クソッ被害が大きすぎる！このままでは・・・）

とりあえず脚部を破損した05の援護へと向かうべく、彼女は最新鋭機のSu-37M2チエルミナートルで戦場を駆け抜ける。

小型種は無視し、目の前に現れた突撃級を120mmの連続砲撃で打ち倒す。

「こちらジャール01だ、無事か！？」

救援に向かった05がまだ無事だった事に安堵し、通信をいれる。

「隊長！ありがとうございます！」

「礼はいい。しかしその状態では戦闘はむりだ。推進剤はまだ残っているな？光線級に気をつけながら、この戦域から全力で撤退するんだ」

「いえ、自分もまだ戦います！動けなくとも砲台の役割くらいならこなせます！」

撤退を命令するも食い下がる部下。その時、戦術機のレーダー警告を示すアラームが鳴り響いた。

「しまった・・・！？光線級！？」

とつさに機体をすぐそばの突撃級の死体に身を屈めるラトロワ。しかし、脚部が破損し身動きがとれない05はそのまま光線級のレーザーを浴びてしまった。

「くそっ！？」

光線級のインターバルの時間の間にラトロワは飛び出し突撃砲を浴びせ、部下の死を悲しむ暇も無く大破したSu-27から弾薬を素早く回収し、弾を装填する。

そして、更に悪い報告がラトロワの耳へと入った。

「こちらジャール08！第5小隊が壊滅！それによりBETA郡約300匹が撤退中の車両部隊へと向かいました！」

「なんて事だ！！？」

この報告を聞き、思わず声を荒げてしまう。この周囲は岩盤などで段差が激しく、車両ではスピードが出にくい。すぐにBETAに追い付かれてしまうだろう。

援軍に部下を頼もうにも既に車両部隊とジャール大隊の間にはBETAが群がっており、その中を突破するしかない。だが現在の戦力

ではそれに成功する確率は限りなくゼロである。
護衛についているアナトリー達を信じるしかない。ラトロワは「頼むぞ」と小さく呟いた。

「ジャール01より各機へ！車両の護衛は既にBETAにより通路を分断され、援軍に向かうのは現戦力では無理である！車両部隊は副隊長達に任せ、我々はこれ以上BETAの進行を食い止めるべくここで奮闘するしかない！各機、最後まで立ち向かえ！！」

「了解！！」

部下達に通信を終え、再び戦闘に集中すべく照準をBETAに合わせる。

（情けない！こんな作戦と言えない事しか命令できないとは！）

悔しさで顔を滲ませながら己の未熟さに部下達に申し訳なく感じる。

状況は最悪。ジャール隊は既に戦力の半分以上を失い、生き残っている衛士達も弾切れや機体破損が激しく満足に動ける機体もなく全滅は時間の問題であった。

だが、この作戦の最終目標はBETAの殲滅ではない。今、撤退している部隊がデータを持ち帰ることができればこちらの勝利だ。

これ以上、BETAを先に行かせる訳にはいかない。そう思いラトロワは照準をあわせ引き金を引き絞った。

例え、こちらが全滅しても誰かが生きてくれている以上はジャール隊はまだ終わらない。再編成などで時間は掛かってしまっただろうが、副隊長のアナトリーは優秀だ。きっと部隊を持ち直してくれるだろ

う。

（ただでは死なんぞ！BETA！！）

BETAを一匹でも多く仕留めようと手に持つ突撃銃を構え、ラトロワは奮起する。祖国の為に。

アナトリーから部隊の救出を頼まれ、目標地点へと向かっていたマークは再び多数の生命反応と熱源反応を捕らえた。恐らくあれが彼らの部隊の本隊だろう。しかし、やはりどう見ても優勢などではなく辺りに無数に散らばる大破した戦術機とそれに混じりながら辛うじて生き残っている戦術機がマシンガンでBETAに応戦している。

状況は予想以上に悪い様子。だが、生き残っている人達がいるだけでもまだいいほうだろう。

マークは作戦空域内に入ったらすぐ応戦できる様、フェザーファンネルを展開する。もう少しで、こちらの射程内。前方にいる他の機体とは若干フォルムが違う戦術機がいるが、こちらに気づいている様子はない。恐らくあれが隊長機だろうか？なるほど、いい動きをしている。

だが、やはり数の暴力には勝てないのかだんだんと押されてきているようだ。

（とりあえずあの機体を救出してからコンタクトをとってみるか・
・）

もう既にフェニックスはBETAを射程に捕らえている。まずはファンネルにより戦術機の周りに群がっている小型種を掃討し、メガビームキャノンで要撃級、突撃級をまとめて吹き飛ばす。

フェニックスから放たれる眩い閃光に辺り一面が包まれる。そして、光が収まるとそこにいたBETA達はビームにより体を焼かれ動かぬ屍となっていた。

あれだけの攻撃を目の前には、流石に戦術機も気づいたのだろう。こちらを振り返りフェニックスを見つめていた。

同時に戦術機の周囲に展開させていたファンネルも小型種の掃討が終わり、フェニックスの元に戻りファンネルを格納させる。

こうしてマークはこの世界にきて2度目のBETAとの戦闘を開始したのであった。

06話（後書き）

物凄く久しぶりの更新です。まだ内容を濃くして投稿したかったのですが、とりあえず前から書いてあった分だけ更新しようと思います。

いい訳じみているかも知れませんが、前の投稿から少しして利き腕を事故で怪我してしまいまして、リハビリやらで小説を書く暇がなかったです。しかし、怪我也完治し、時間に余裕ができたことからまたばちちと更新していこうかなと思います。多分で、ところどころ矛盾してたりするかも知れませんが、これからもよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4085p/>

Muv-Luv A-Generation

2011年5月30日05時44分発行